
半熟ナルキッソス

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半熟ナルキッソス

【NZコード】

N88381

【作者名】

久芳

【あらすじ】

夏美はクラスでナルシストといわれていた。いつも鏡で自分を見ているからだ。クラスでは浮いた存在になっているけれど、本人は特別それを気にしていなかつた。そんな彼女に、同じクラスにいるもう一人のナルシスト、成沢が話しかけてくる……。

黒目がちな瞳が好き。

ふつくりとした唇が好き。

なだらかな鎖骨が好き。

胸まで伸ばした髪が好き。

しなやかな細い手首が好き。

長い指先の小さな爪が好き。

膝の上にあるほくろが好き。

あたしは綺麗。

あたしは美しい。

あたしはとても、美しい。

「ほら、ナル美、またやつてるよ」

「夏美ちゃん? あ、ほんとだ」

手鏡を覗きこむあたしの耳に、いつもの声が聞こえてきた。

「あの子、時間さえあればいつもああやつて手鏡のぞきこんでるんだよね。前、お弁当食べながら見てたときはほんとにびっくりしたけど。知つてた?」

「メイク直すのでもあんなに頻繁には見ないよね。休み時間」と云々ああじゃない? 私、夏美ちゃんがほかの子と話してるのはほとんど見たことないよ」

「わたしらのことなんて興味ないんじゃない? 自分のこと見てるのが楽しいんだろうし、ほんとナルシストだよね」

マスカラがおちていいかチェックしながら、あたしは手鏡の角度を変えてちらりと視線をやる。するとふたりは「うわ、見てるし……」と呟いたきり、話をしなくなつた。

そんなに嫌なら、あたしを見なければいいだけのことなのに。
乾いた唇にリップクリームを塗り、あたしは鏡をブレザーのポケットにしまう。マイクは毎日してるけど、みんなのようにばっかりつくつてはいない。自分の良いところが引き立てばそれでよかつた。授業の合間の休み時間は、いつも同じことをして過ごした。

まず、顔のチェック。マイクが崩れていなか、新しいニキビができるでいいのか確かめる。もしそこで脂浮きや、肌荒れがあつたらすぐに手入れをする。ニキビも悪化させないようにすぐ薬を塗った。次に見るのは、爪。透明のマニキュアがはがれていなか、形は変じやないか、間になか入つていなか。歪みがあつたら、すぐに直す。だからカバンにはいつも手入れの道具一式がはいつていた。最後に、髪。櫛を入れながら、枝毛ができるでいいのか目をとおす。毎日トリートメントをしているから傷みこそないけど、髪だけはどうしても乱れやすい。中学のころから伸ばし続けていた髪を丹念に梳くのはとても楽しかつた。

それでもまだ時間があつたら、クリームで手や足をマッサージする。ひとりで黙々としているうちに、十分なんてあつといつ間にすぎていつた。

友達なんていらない。ああやつて、人の悪口ばっかり言つ醜い人なんて必要ない。

あたしは綺麗でいたい。綺麗な身体を保つて、綺麗な言葉だけ聞いて、綺麗なものだけ見ていたい。

だから、あんな人たち必要ない。

「……でも、うちらのクラス、ナルシスト多くない？」

「多いつていうか、ふたりでしょ」

「じゅうぶん多いつてば。なにも一クラスにひとり、ナルシストいるわけじゃないしさ」

騒がしい教室の中で、やけにあの一人の声が耳に届く。これぐらいの会話はいつものことだからいい。だけど気に入らない人の悪口を言つて、二人で嘲笑つてゐるときの声だけは、聞いているといつも嫌な気分になつた。

「なんだよ、また俺のこと話してたのか？」

新たに加わつた声に、あたしははつと顔をあげた。

「俺のことかっこいいって？ 言われなくとも知つてるよ」

「そんなこと言つてないし！ ほんとナル沢、ナルシスト野郎だし！」

ぎやあぎやあと声をあげるふたりに、彼は大きな口を開けて豪快に笑つてゐる。手加減なく背中を叩かれて、いつてえと声をあげるその姿は不思議とみんなの目を引いていた。

成沢剛志くん。なりさわつよし通称、ナル沢。

彼はあたし同様、クラスでナルシストと言われてゐる人だつた。

正直、成沢くんのことは苦手だった。

「夏美って、いつも鏡見てるよな？」

だからなるべく距離を置こうとしているのに、なぜか席はあたしの前。だから彼はことあるごとに話しかけてきて、自彌の時間ともなれば勝手に机をつけてあたしのプリントをつづりはじめた。

「自分の顔ばかり見て飽きないのか？」

「……飽きない」

自彌の課題を早々と終えたあたしは、また鏡をとりだして自分と向き合っていた。メイクこそ崩れていなければ、表情のチェックをしたくなつたからだ。いつも正面から見ている自分の顔も、すこし角度をつければまた違つて見える。それも把握しておきたかった。

右から見た顔より、左から見たほうが表情が明るく見える。歯を見せて笑うより、唇だけにしておいたほうがいいみたい。自分がより綺麗に見えるポイントを見つけたときの喜びが、あたしにどつてなによりの快感だった。

そんなあたしを、成沢くんがものめずらしそうに見てくる。彼はあたしと違つて、手鏡を眺める習慣はない。道行く窓ガラスや鏡で自分をチェックすることはあるけれど、気にするのはむしろ自分を見ている周りの目。学校行事でやたらカメラにアピールしたりするのはいつものことで、『俺つてカッコイイだろ』が口癖だった。

みんなはあたしも成沢くんも同じナルシストだというけれど、厳密にいえば種類が違う。だからあたしは成沢くんが苦手だった。

「なんでそんなに鏡見んの？」

「好きだから」

「自分の顔が？」

「うう」

どんなに冷たく返しても、彼は決してあきらめない。鏡を閉じて真正面に向き合い、睨むように見つめてみても、あつさりと笑い返されるだけでも、たく意味がなかつた。

成沢くんはたしかにかつこいいと思つ。背こそそんなに高くないけれど、運動神経がいいので体育のときによく立つ。くしゃくしやの蓬髪が活発な動きにあわせて揺れて、こわいふと変わる表情は嫌な印象なんて決して与えない。

だから成沢くんは、クラスでとても好かれていた。

「そんなに俺、かつこいい？」

「ばかじゃないの」

あたしがきつぱり言い放つと、成沢くんは肩をすくめて舌を出す。そんな愛嬌のあるしぐさをびりして自然にできるのか、思わずあたしが感心してこらへりぱっと手鏡を奪われた。

「夏美はこつも、こつやつて自分のこと見てるのか」
へえ、とにかくするよにして、成沢くんが鏡の中の自分をのぞきこむ。角度を変えて観察したり、笑顔をつくつてみたり、さらにはおちやらけてポーズをとつてみたりと、完全にあたしの習慣をからかつっていた。

「返してよ」

「やだ」

「成沢くんには必要ないでしょ」

「まあ、な。俺はどうから見てもかつこいいし？」

鏡ごとにウインクを決められて、あたしは奪い返そつと身を乗り出す。けれど成沢くんの反射神経には敵わず、どんなに手を伸ばしてもあつさりとかわされてしまつだけだった。

「夏美。鏡の中こつこついる自分がすべてじゃないぞ？」

「なによそれ」

「鏡の中でぱつちり決めてても、自分からじゃ見えないものもあるつてこと。田を閉じてるときの顔は、自分じゃわからないだろ?」

「そんなの、言わねくてもわかってるわよ」

突然なにを言い出すんだね!。むさと鏡を取り返してしまったいけど、成沢くんにいよいよ遊ばれてる姿はどう見ても綺麗じゃない。あたしはじつところえて、彼が自ら返してくれるのを待つことにした。

言われなくともわかってる。鏡で見る自分がすべてじゃなくて、むしろほんの一部なこともわかってる。自分じゃ確認できない姿がいっぱいあるのもわかつてる。

でも、大丈夫。あたしは綺麗で、あたしは美しいんだから。

「鏡がないと怖いんだろ?」

「いけない?」

「夏美、ほんとは自分のこと好きじゃないだろ?」

ふいに、成沢くんの表情が変わった。

「だから、いつも鏡見てるんだろ。変なところはないかって気にしてるんだろ。『まかしてるところ、崩れてないか心配なんだろ』いつもの飄々とした笑みが消えて、見たこともないまっすぐな瞳があたしを見つめてくる。その見透かすような視線がこわくなつて、あたしは思わず唇を噛んだ。

「人になにか言われるのがこわいんだろ。だから、自分を完璧にして、なに言われても平気だつて知らんぷりしたいんだろ」

唇にあどがつくと思って、あたしはあわてて口元に手をやる。唇をかばう指先が歯に触れて、つい、爪を噛んでしまった。

かりつと、いやな音がした。見ると、爪の先がすこしだけ欠けていた。

「あ……」

あたしの顔から血の気が引いた。

あれだけ手入れしていた爪が。指先が。綺麗を保っていたはずの手が、崩れてしまった。

この手は、美しくない。

成沢くんといふといけない。自分の綺麗が崩れしていく。美しい自分がどんどんなくなつていつてしまふ。

「夏美はナルシストって言わない。ただの臆病者だ」

「わかってるわよ！」

震える唇から、自分でも驚くぐらい、大きな声が出た。

「いちいち言われなくても、わかってる！」

ひるんだ隙を見て、成沢くんから手鏡を奪う。彼の顔を見ることができなくて、とつさに睨んだのはブレザーの校章だった。

「なつみ」

「うるさい！」

勢いよく立ち上がり、反動で椅子が倒れる。その派手な音に騒がしかつた教室がしんとしずまりかえつて、視線が集まるのを感じたけどそれどころではなかつた。

爪を直さなきや。唇が切れてないか確かめなきや。綺麗でいなきや。成沢くんから離れなきや。頭がいっぱいになつて、身体がぶるぶると震えだす。

「なつ……」

「ほつといてよー。」

鏡と、ポーチと、畠についたものをカバンに詰め込み、あたしは教室から飛び出した。

あたしは綺麗。

あたしは美しい。

あたしはとても、美しい。

鏡を見ながら、あたしは自分にそう笑いかける。髪を伸ばして落ち着いた雰囲気にしているので、ほんのすこし口角と田じりを動かして、しつとりとした微笑みを浮かべるのが一番似合っていた。

あたしがどうぞに逃げ込んだのは、立ち入り禁止の屋上へと続く階段だった。

そこへ走っていく姿は誰にも見られなかつたようで、授業が終わつても休み時間が終わつても次の授業が始まつても、あたしを心配して追つてくる人は誰一人としていなかつた。そもそもここは中学ではなく高校なのだから、授業に出るのも出ないのも個人の責任だ。

「……やつちやつた」

屋上への扉に背中をあずけて、咳く声は狭い踊り場の中で反響する。あたしの足元には、鏡や爪切りやマニキュアや、崩れたところを直す道具で散らかつていた。

爪と、手と、唇と顔を確認して、それでようやく落ち着いた。脱力して、あたしはこの場から一歩も動けぬまま、昼休みをむかえようとしていた。

あたしはただの、コンプレックスのかたまりだった。

中学校のはじめの一年間。さんざんいじめられていたのはもう過去のこと。あれこれ言われたのも過去のこと。一年生のクラス替えから生活は戻つたはずなのに、その一年の生活で、あたしはすっか

り自分の容姿が嫌いになってしまった。

だからそれを、すこしでもましにしようと必死で磨いた。良いところはできる限り引き立てるようにした。まだ整形をすることなんてできなかから、自分のできる範囲で、とにかく美しくなれるよう努力した。

『夏美ちゃん、爪つちやくて可愛いね』

そんなあたしに、新しいクラスの子がかけてくれた声がとても嬉しかった。自分が密かに努力していることを、認めてもらえたのが嬉しかった。

『夏美ちゃんって、まつげ長いんだね』

『夏美の使ってるヘアピン、かわいいね。どこで買ったの?』

『夏美ちゃんって髪まつすぐだからうらやましいな』

褒めてもらえたところはとことん伸ばした。逆に、嘲笑われたところは必死で隠した。一年のこのクラスメイトと廊下で会つても、視線を感じたけど知らん顔ですれ違つた。

あたしの陰口を言う人がいても、聞こえないふりをして、あとになつて言われたところを直した。磨きあげたところはなんと言われても無視した。

見た目のことだけじゃなくて、勉強だって躍起になつて取り組んだ。あれこれ言って来る人たちよりも悪い成績にはなりたくないかった。猛勉強のおかげで、あたしの入学した高校に、同じ中学の生徒はほとんどいなかつた。

高校でまた、同じ目にはあいたくなかった。だから自分磨きは怠らなかつたし、成績だつて落とさなかつた。

『夏美ちゃんつて肌綺麗だよね』

『夏美はいつも成績いいよな』

そう言つてもらうことだけがすべてだつた。

どこか変なところはないか。またなにか言われるんじやないか。いつもそればかりが気になつて、どうしても鏡を手放すことができない。

そしていつしか、ナルシストと言われるよつになつていた。

あたしは、ナルシストなんかじやない。

ナルシストは、自分がことが好きな人だ。自分が大好きで、自分を愛していて、自分を抱きしめたいと思う人たちのことだ。

あたしは違う。自分のことなんてこれっぽっちも好きじやない。抱きしめたくもないし顔も見たくもない。

夏美はナルシストつて言わない。

成沢くんはそれに気づいていた。

彼なら一目でわかつたんだと思つ。あたしが頻繁に鏡を見る理由も、爪の手入ればかりする理由も、自己陶酔のためじやない。自分の醜いところを、必死に隠すことだと。

教室に戻らなきや。そう自分に言い聞かせて、あたしはどうしてもこの場から動けずにいた。動こうとしてもおしりがぴつたりと床にはりつき、立ち上ることさえできなかつた。

膝が震えている。それを抱く手も震えている。がたがたと震える衣擦れや、かちかちと鳴る歯の音が聞こえる。それはまぎれもなく自分のもので、止めようと思つても身体はいうことを聞かなかつた。顔は大丈夫。身体は大丈夫。どこも変なところなんてないから、なにも言われたりしない。わかっているのだけど、教室を飛び出し

たときのあの視線をどうしても忘れることができなかつた。

取り乱すなんてみつともない。いつも静かで冷静で、落ち着いている子でいたかつた。

大声で笑うような、品のないことはしたくなかった。人を見てげらげらと嘲笑う人にだけはなりたくなかつた。

笑われる人にも、後ろ指を指される人にもなりたくなかつた。教室に戻るでも、帰るでも、とにかくこの場から動かなきやいけない。でも、身体がついてこない。震える膝と懸命に戦つているうちに、誰かが階段を上の足音が聞こえてきた。

隠れることも、逃げることもできない。あたしは呆然と、誰も来ないはずの場所に来た彼を見上げた。

「……成沢くん」

彼は、ぱりぱりと気まずそうに頭をかいた。

「あやまらないからな」

そうぶつかりまづに言つて、成沢くんはあたしの隣にどかつと座りこんだ。

彼が来た驚きで震えこよとまつたけど、あたしはいぜん、身動きをとることができなかつた。肘と肘がぶつかるぐらい近い距離にいる成沢くんに、自然と身体がこわばる。まともに顔を見る 것도できなくて、あたしは膝に顔をうずめた。

「なによ、笑いに来たの？」

「違うつて」

「授業はどうしたのよ、探しに来たの？」

「もう昼休み。夏美を探してたわけじゃなくて、じー、俺の憩いの場なの」

そのわりに、どうしてお弁当と一緒に購買のパンをたくさん抱えてきたんだろう。たしかに成沢くんがよく食べるのは知っていたけ

ど、むりやり手に握られたメロンパンとコーヒー牛乳はわたしのために買つてきたのだとしか思えなかつた。

「うー、静かでいいだろ。人が来ることもめつたにないしな

「……うん」

「とりあえず、顔あげたら? そんなんことしたらよけい化粧落ちるぞ?」

成沢くんの指摘に、あたしははつと顔をあげる。顔にかかる髪を、手ぐしで直してくれたのは彼だつた。

あぐらをかいた膝の上にお弁当を広げて、成沢くんはミートボーラをつつく。本当にただ「飯を食べにきただけなのかも、あたしは呆然とその横顔を眺めた。

不思議と、彼が隣にいることが嫌じゃなくなつていった。成沢くんの顔を見た瞬間、身体のふるえがとまつたのは確かなことで、スカラートのプリーツが乱れようと中が見えそうになつていようと、自分がとてもひどい顔をしているであるつことを見られても、必死に取り繕つとは思わなかつた。

「……あやまらないからな」

もう一度、成沢くんが言う。視線はお弁当に落としたまま、口調もぶつきらぼうで、その姿はいつも教室で見る彼の姿とは違つものだった。

「べつに……」

もうひたコーヒー牛乳のパックにストローをさしながら、あたしは咳く。唇がつんととがつていて、まるで子供のようだと思つたけど、自分ではうまく直すことができなかつた。

一口飲んで、その苦さと甘さにてこわばつていた身体がほぐれていくのを感じる。ほっと一息ついたあたしを見て、成沢くんがそつと笑つた。

その笑みですら、いつもと違つ。あたしと皿があつても、おちやらけたりしない。俺つてかっこいいだろ、とも言わない。苦手だな、と思う彼の姿は今、ここになかつた。

「……あたし、ナルシストじゃないよ

「知つてる」

言つて、成沢くんは箸を置いた。

「俺も、ナルシストじゃないし

「うそだ」

「ほんとだよ」

たつぱり、三秒は見つめあつたと思つ。

「夏美と一緒になんだ」

ややあつてから、成沢くんがそう笑つた。

笑つたといふべきか、息をついたといふべきか。唇こそ微笑んでいるけど、その眉根は寄つてしまが刻まれている。苦笑にも似た、今にも泣き出しそうな、弱々しい表情だつた。

「ほんとは、自分のこと、あまり好きじやない。自信なんてないしかつこいいとも思つてない」

「でも、俺はかつこいいって、いつも言つてるじやない」

「夏美の鏡と一緒にだよ」

背中をどつぱりと扉にあずけ、彼は天井を仰ぐ。のけぞつた喉が

たくましいけど、吐き出す声はかすれて聞き取りづらい。

「俺つてかつこいいだろ、って言つて。それでいつも『調子乗るな』って言われるけどさ、でも嫌われてはいないだろ？……なんだろうな、人に好かれてるかどうかを確かめたいんだよ」

鼻の頭をかきながら、成沢くんがすこし言いよどむ。すると踊り場はしんと静まり返つて、お互いの息づかいしか聞こえなくなる。下の階ではいつもじおりみんながいるはずなのに、その気配が階段を上つてくることはなかった。

「人に好かれる自分はさ、自分でも好きだと思えるんだ。だから、人に好かれてるのを確かめたくて、いつもああやつてるだけ」

「……うそ」

「ほんとだつてば。まわりが勝手にナルシストだつて言うだけだ」 夏美と一緒に、その言葉を繰り返して、成沢くんがあたしの頭を撫でた。

「だから、夏美見てると、もう一人の自分を見てるような気分になるんだよな……」

大きな手を頭に乗せられて、あたしはほつと落ち着く自分がいることに気づく。長い髪を上から下へと伝う指先に、不思議と、心地よさのようなものまで感じていた。

「人の目がこわくて、なにか言わるのがこわくてびくびくして、自分を隠そつと必死になつてさ。友達なんていらない、一人でも大丈夫だつて自分に言い聞かせて、本当はひとりが怖くてたまらないくせに」

「すばり、図星だつた。

「前の俺もさ、そんな感じだつたんだよな。夏美のこと、全部わかるわけじゃないけど、それでもわかるものがあつたから放つておけなかつたんだよ」

「放つておいてくれればいいのに」

「ほんとに夏美は、いじっぱりだな」

「いいじゃない別に」

「ほんとはがまつてほし〜くせに」

「成沢くんってほんと自意識過剰だよね」

「知ってる。だから、夏美には助けが必要だなって思つたんだよ」
やつぱり、成沢くんにはなんでもお見通しだった。あたしはもう
なにも言えなくなつて、泣き出しそうなを氣づかれないようにま
た顔をうずめて隠すことしかできなかつた。

「日に日にひどくなつてくの、見てたからさ。そのうち自爆してつ
ぶれるんじやないかつて、ひやひやしてた」

だから、自習のときこいつたのだと。あたしの頭を撫で続けなが
ら、彼は言つた。

「自分のこと、好きになれないけどさ。それでも自分を磨いて綺麗
に見せよひとつとか、そういう行動に出るつていうことはさ。夏美の心
の根っこは、まだ自分のことが好きなんだつて、俺は思つんだよな」
違う? と訊かれても、あたしはこたえることができなかつた。

成沢くんも特別それに答えが欲しかつたわけではないようで、すこ
しあたしの様子をうかがい、また口を開く。

「夏美は自分を守るうとしてるだけ。俺も守るうとしてるし、それ
はみんなやつてる事。ただ人それぞれ方法が違うだけでさ、それ
を見てどう思うかも人それぞれなんだよ」

end

成沢くんに言わせれば、あのふたりだけて、自分を守るためにあやつて人を見て笑つているらしい。

「……あのふたりはむしろ、俺も最初ちょっと苦手だったんだよ。でも、あれがあいつらなりのアピールでむしろ、ほんとは、夏美と仲良くなりたいって思つてるんだって」

「うそ」

「うそ、じゃない。俺、夏美の話してるの聞いたことがあるけど、それこそ夏美が綺麗にしてるとかすこいつらやまじがつてたぞ？」
「ああやつぱり、あたしは陰でいろいろ言われている。やつ思つと、よけい気が滅入つてうなだれてしまう。

「……夏美が、ふたりの言葉に敏感になるつてことはむしろ、それだけ、ふたりのことが気になるからだろ？」一回喋つてみろよ」

「いやよ。ひとの陰口ばっかり言つて、綺麗じやないもの」「だから、あれがふたりなりの愛情表現なんだってば」「そんなの知りたくない」

目に見える綺麗だけでいい。耳に聞こえる綺麗だけでいい。深く入り込まなければならぬ綺麗は、あたしにはいらなかつた。

違う。

「だつて、こわいもの」

あたしはただ、逃げているだけだった。

ほんとうの自分を見せて、それを知った人たちがまた、昔のように対しを嘲笑つてきた。それを考へるとともにこわくなつて、お互に深く関わらないようにと距離をおくよになつっていた。

結局あたしは、中学の頃からちつとも成長していなかつた。

「……あたし、もう教室に戻れないよ」

「戻つてこい」

「こわいの。じぶじぶ見られるのとか、絶対、嫌。なに言われるか

わかんない

「いいから、戻つて」

ぐしゃぐしゃと乱暴に髪を乱して、成沢くんは手を離した。

「みんな、心配してたから。笑つてたやつなんていないから。追いかけようか迷つてたやつも、いたから」

「でも、こなかつたもの」

「それは夏美がみんなに壁はつてるから。みんな、壁はられてることに気づいてるから、気になつてもなかなか近づけないんだよ。女子でも男子でも、夏美のこと気になつてるやつらたくさんいるぞ？」
クラスのみんなには、あたしから距離をおいていた。結局みんな、あたしがいなくなると陰口を言つと思っていたから。あたしからおいでいる距離を自ら縮めようとしつくる奇特な人なんて、成沢くんぐらいだった。

「俺、こいつやって夏美の中身と話せて、嬉しいけどなあ。たぶんみんなだつて、話してみたいと思つてるだらう」

「でも……」

「でもじやなくて、実際やつてみようぜ？」こいつだうだしてたつて、なにもはじまらないし答えも出ないしさ」

ぱんと、彼があたしの膝を叩いた。

「夏美だつて、そいやつて壁はつてる自分に疲れてるんだろ？ 全部崩せとは言わないからさ、ちょっとだけ空気穴あけてみろよ」

「……やりかた、わかんないし」

「笑つてみる、なにも考えずにこいつ。化粧で綺麗にするより、表情ひとつ変えるほうが全然いいぞ？ 笑顔は誰でも綺麗に見えるし、その効果は俺が一番知つてるからさ」

立ち上がり、成沢くんはおしゃりについたほこりをぱんぱんと払う。そしておもむろにあたしを振り向き、手を差し出した。

「行こひげ。そろそろ予鈴鳴るぞ？」

「でも……」

ためらつあたしの顔を、成沢くんが両手で包み込む。なにをされ

るかと思つたら、そのままぐいぐいと頬を揉みくちゃにされた。こりかたまつた表情筋をほぐすように、成沢くんはあたしの口角をひっぱる。頬を伝つた涙の残りも、触れた時点で氣づいているとと思う。あたしが抵抗すると、彼はあつたりと手を離してくれた。

そして、手首をつかんで立ちあがらせる。まつたく動けなかつたのが嘘のように、あたしはあつたりと立ちあがることができた。

「……こわいよ」

「俺だつて毎日こわいさ」

あつけらかんと、成沢くんが言ひ。くしゃりと笑つて、また頭を撫でてくれる。

そのぬくもりと、自然と、あたしの口から笑みがこぼれ落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8838i/>

半熟ナルキッソス

2010年10月8日15時25分発行